「願い」を形にする中で，「問い」を主体的に追求する子ども

― 中学２年「自分の願いが込められたウォールポケットの製作」の実践から ―

１　題材のねらい

ウォールポケット作りの計画，製作，評価といった一連の学習過程を進める中で，生活を豊かにしようという願いをもって取り組み，願いを形にするには製作の各段階でどのような製作方法がよいか多面的に考えながら計画的に製作することができる。

２　授業の構想

⑴　子どものとらえについて

生徒は小学校の家庭科の授業において「生活に役立つ物の製作」を通して，布を用いた作品を作っている。その際，「製作する物を考え，形などを工夫し，製作計画を立てる」ことや「手縫いや，ミシン縫いを用いた直線縫いにより目的に応じた縫い方を考えて製作し，活用できる」という技能を習得している。

中学２年生における家庭科の学習が始まる際，本学級の生徒にアンケート調査を行った。アンケート調査では，次のような結果が得られた。まず，裁縫が好きかどうかの質問に対し30人中４人が好き，18人がどちらかというと好きという肯定的な回答であった。７人がどちらかというと苦手，１人が苦手という回答であった。中学校になってから布製品を家庭で製作した経験がある生徒は３人だった。型紙について質問したところ，26人が使ったことがなかったり，そもそも型紙が何か分からなかったりする状態であることがわかった。裁縫をすることに対する興味・関心は高いが，生活経験の違いにより製作するための技能に差が見られる。このような実態から，基礎的な裁縫に関する技能を付けたうえで本題材に入る必要があると感じ，基礎縫い練習（３時間）と小物製作（４時間）を共通の課題として行い，本題材へ入ることにした。

自分の生活に必要なウォールポケットを考えることで，家庭での住生活について考えを深めるきっかけになる。そして，ウォールポケットが自分の課題を解決できる作品として，一人一人にとって必要感のあるデザインを考えつくことが期待できる。このようにそれぞれの生徒が，自分の願いを形にするためには，どのようなデザインでどのような布の扱いや縫い方が適切かといったことを多面的に考える中で，「問い」を主体的に追及するようになると期待する。この学習を通し，生活を見つめ工夫し創造することを経験し，さらにものづくりの楽しさと完成したウォールポケットを使用する喜びを経験することで，さらなる「問い」をもち続けるようになると考える。

⑵　本題材において求めたい姿とそのための手立て

本学校園の技術・家庭科では，「生活の中の課題を多面的にとらえ，習得した知識や技能を活用し，自ら活用しようとする姿」を大切にしている。実生活の中から「課題」を見いだしたときに，生活をよりよくしたいという「願い」が生まれ，その願いを実現するためにどうすればよいか考える中で「問い」が生まれると考えている。この，「課題」「願い」「問い」が子どもたちの中で太くつながったときに，主体的に追求する姿が表出してくるであろう。

本題材は，生徒が自分の生活をより豊かにするという願いをもち，自らが計画を立ててウォールポケットを製作することができる。生活の中の課題をとらえ解決に至ると考え設定した。生活を見つめることで「願いをもつ」こと，その「願い」を形にするにはどのような方法を用い製作すればよいのか考えることにより「問い」との出会いが生まれる。「問い」を解決するために計画を立て

て製作を行う中で，作り方や製作手順を試行錯誤しながら進めることができる。このことにより，「問い」を主体的に追及する姿が育まれると考える。さらに，この「問い」を追求していくということは，製作の各工程においてただ作り方に沿って製作するのではなく，既習の技能をいかに利用すべきかというように多面的に考え実行することにより深まっていくと考える。

まず，デザインについては自分の住まいにこのウォールポケットがいかに役立つ物になるのかという必要感を感じられるものを考えさせたい。そして，イメージを形にするために，各自がオリジナルのデザインを追求し課題解決を図っていく。その中で，個人の考えを他者に伝えたり，他者の意見を聞いたりしながら試行錯誤する活動を取り入れ，主体的な追求を深めていきたい。完成した作品は家庭で使用し，使い心地を評価する。

さらに，ウォールポケットにどのような工夫を施すかを考える中で，普段何気なく過ごしている住空間について見つめ直すことができる。学習指導要領内容Cの（2）イ「快適な住まい方を工夫できる」との関連を図り，布製品の便利さや装飾性についても感じさせ，布製品が快適な住空間を創りだす役割も担っていることに気付かせたい。製作の材料は同一のものを準備するが，リメイクした布製品を部分的な材料として用いてもよいことにし，各家庭での布製品の処分についても関心をもたせたい。

この一連の製作を通し，ものづくりにおいてよりよい方法を常に模索し最適解を導き出す意識を育てていきたい。

3　展開計画（全10時間）

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇追求する子どもの姿
1	1 2・3	○ウォールポケットの計画 ・デザインを考える。 ※他者の意見を通し自分の考えを深める。 ・作り方の手順を考える。 ・「型紙」を製作する。 ※「型紙」の製作を通し，製作の手順を考える。	◇「願い」をもち自分の生活に役立つウォールポケットをデザインしている。 ◇「型紙」をつくることで手順を具体的に考え，製作の計画を立てることができる。
	4 5 6～9	○ウォールポケットの製作 ・「型紙」を置き，裁断をする。 ・チャコペーパーを用い，しるし付けを行う。 ・ミシンあるいは手縫いにより縫製を行う。	◇既習の技能の中から最適な方法を用いて製作している。
	10	○ふりかえり ・家庭で実際に使用し，自己評価を行う。各自が自己評価したものを学級で共有する。	◇自分の「願い」が満たされる作品になったかどうか評価している。

4　授業の実際

(1) 1～3時　ウォールポケットの計画

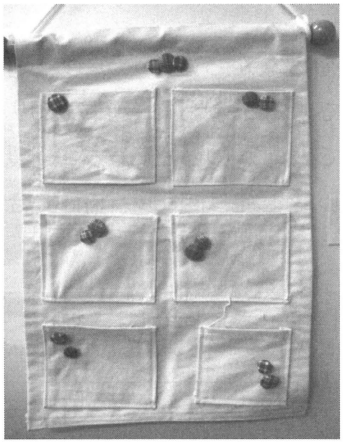
① 1時　デザインを考える。

生活の中からウォールポケットによって解決可能な「課題」を発見する。「課題」を解決するため，工夫を凝らしたウォールポケットのデザインを考える。そのためには，家庭で実際に大きさを計測したり，改めて家の中を見渡したりすることが大切になる。自分の生活に必要感のあるデザインを考えることで，完成後の達成感や実際に使う意味が増すであろう。このデザインを考える段階でじっくりと取り組ませることにより「願い」が深まる。さらに，その「願い」をかなえるための

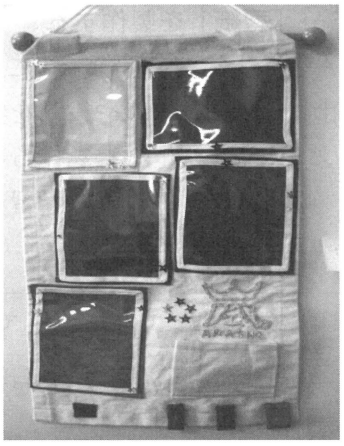
デザインをどのようにすれば形として布製品にすることができるのか，「問い」が生まれてくる。

生徒のデザインへの思いは次のようなものがあった。

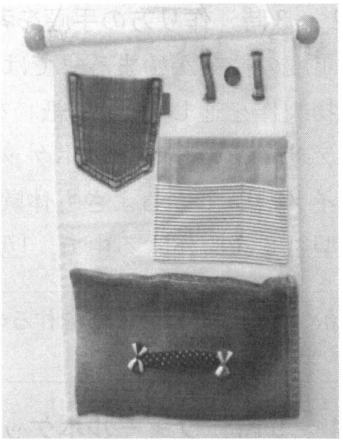
- 玄関にそのまま鍵が置きっぱなしになっていたりして，ものがなくなりやすかったので小物入れを作ろうと思いました。四角く中くらいの袋を家族１人ずつ合計５つ作り，家族共有のスペースを１つ作りたいです。丈夫に縫って長持ちさせるようにしたいです。（図１：生徒Ａ）
- いつもコードが絡まってしまいごちゃごちゃしているので，コードや充電器をきれいに片づけられるようなウォールポケットが作りたいです。写真も飾れるようにして，布は自分の好きな色も加えたいです。（図２：生徒Ｂ）
- 出来るだけエコにするために弟のＧパンをリメイクしてティシュカバーやポケット，自転車の鍵かけを作ります。また，ティッシュ自体も箱ではなくビニールの詰め替え式のものが入る大きさで作ります。（図３：生徒Ｃ）



（図1：生徒A）



（図2：生徒B）



（図3：生徒C）

一人一人のデザインの工夫点や思いを班内で共有し，アドバイスし合った。アドバイスし合うことにより，現実的に作れるかや，実際の使いやすさはどうかなど検討し，さらに友だちの意見を取り入れたデザインに変更する様子が見られた（図４）。図４の□の部分が友達の意見によりデザインの変更を行った箇所である。また，班内で友だちの作るものが分かり合っていることで製作段階においても助言しやすく，学び合いに繋がっていった。デザインを変更することでより生活を豊かにする作品に仕上がっている（図５）。

デザインは自分の生活を豊かにすることを第一の目的としていることを忘れず，目的意識を明確にもち考えるようにした。また，リメイクを用いたり，家の布を利用したりする工夫もあると伝え，エコ感覚を取り入れたデザインのよさについて教師から助言し，多面的にデザインを考えることができるようにした。

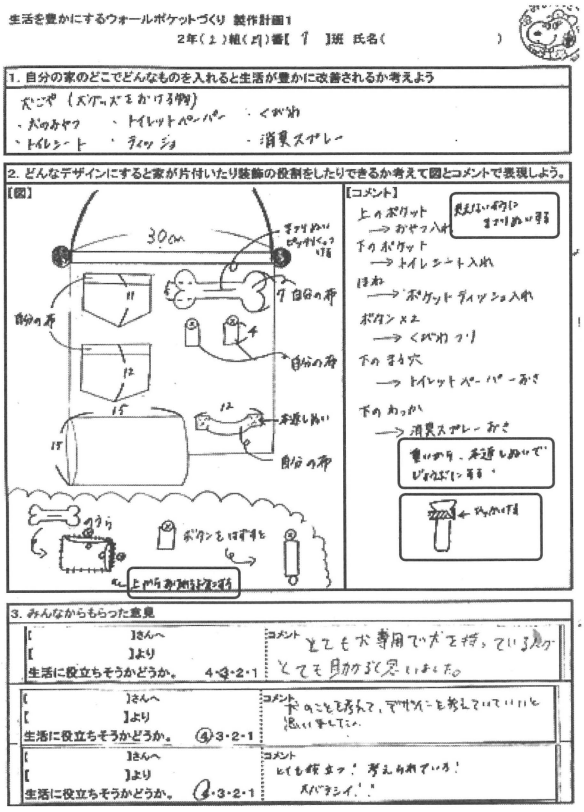


図4：製作計画

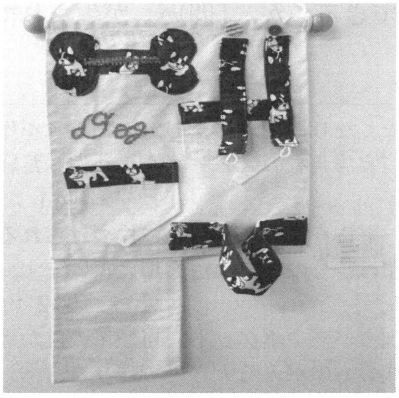


図5：図4の作品

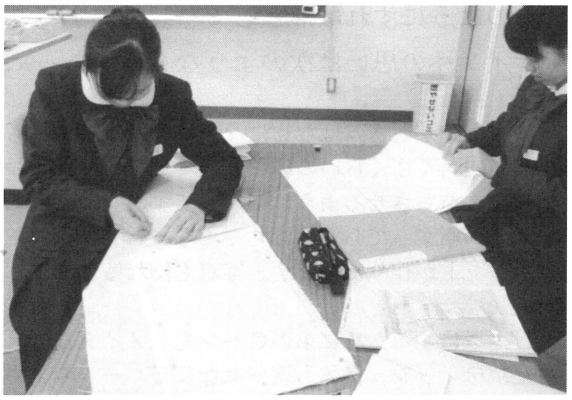


図6：型紙作りの様子

② 2・3時　作り方の手順を考える→「型紙」を製作する

今年度の授業が始まるまではほとんどの生徒が「型紙」のことを知らなかった。しかし，前題材の小物製作を通して，「型紙」を利用する方法と意義や役割を学んでいる。さらに今回のオリジナルのデザインのウォールポケットにおいては，「型紙」を作ることで大きさのイメージや縫製の順番がイメージできるよさも体験した（**図6**）。このような学習を通し，生徒は自分の作品に合わせて「型紙」を製作する中で，「型紙」のよさを実感できた。

> 始めはウォールポケットを作るのは難しそうだと思っていました。でも，「型紙」さえとれれば，あとは丁寧にやれば出来ました。（生徒D）

(2) 4～9時　ウォールポケットの製作

① 4・5時 「型紙」を置き，裁断をする→チャコペーパーを用い，しるし付けを行う

裁断，しるし付けは前題材の小物製作の経験をいかし，自分たちで学び合いながら作業を進めることができた。今回のように，各自オリジナルのデザインであると一見学び合うことが難しいように感じる。しかし，一度小物製作で段階を踏んで作業したことにより，基礎力が定着しており，さらに友だちの「課題」「問い」を一緒に考え解決することでその基礎力をもとに課題解決に向けて追求し合う楽しさを感じている様子が見受けられた。

② 6～9時　ミシンあるいは手縫いにより縫製を行う

縫製の順番は各自が計画し,その計画に沿って作業を行った。毎時間生徒が書く「ふりかえりシート」と提出した作品のチェックを次時までに行い，気付いたことはアドバイスをして返却した（**図7**）。教員からのアドバイスに対し自分だけで理解できないときには友だちと学び合い，主体的に解決していく姿が見られた。

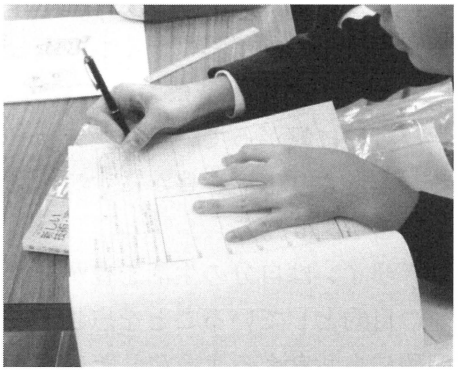


図7：ふりかえりシートの記入

ミシンの使い方に関しても同様で，使用方法がわからないときは友だちと相談して考え，良い方法を見つける様子が見られた。

縫い方に関しては，縫う場所により丈夫さや縫い目の見え具合いなど考えて行うようにした。例えばポケット口では，（ⅰ）三角に縫う（ⅱ）縫い返す（ⅲ）四角に縫うなどの方法を提示し，作品に合わせて生徒が選び，より用途に合うものを選択した。また，布端の始末は三つ折りか二つ折りで選択させた。これに関しても用途により，よりよい方法を見つけることができた。

作品を作っている途中にデザインの変更がおこることもたびたびあった。随時，縫い方やポケットの大きさなど試行錯誤することを大切にした。自分でデザインし，形にした作品が出来上がることで達成感も大きくなる。このように試行錯誤しながら作業を進めていくことで，目的である自分の生活に役立つものづくりを意識し製作することができた。

さらに，環境問題にも関心をもちリメイク（**図７，図８**)や廃材利用（**図９**）を行う様子もみられた。例えば，弟の小さくなったGパンを用いリメイクを行っていたり，自分のはけなくなったスカートを用いリメイクを行っていたりした。中には環境のことを考えて，外箱のないエコタイプのティッシュボックスを用いる生徒もいた。環境に関することが意識されている作品を随時紹介していく中で，生徒の中で自分も何か工夫したいという思いが高まっていった。

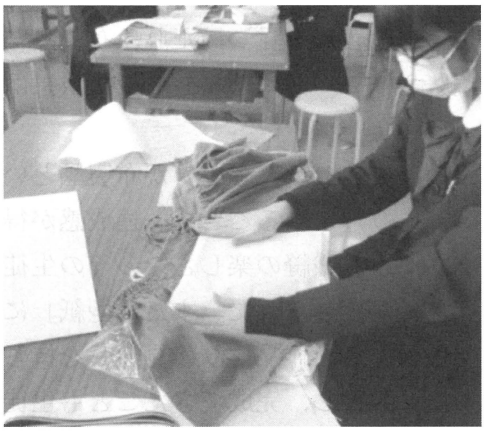


図7：リメイクの様子

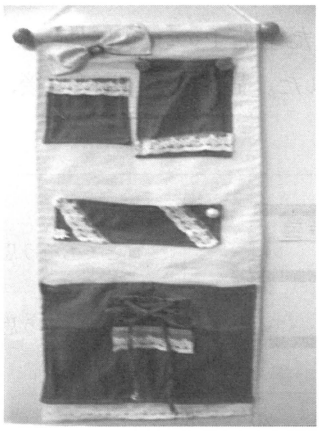


図8：リメイク作品

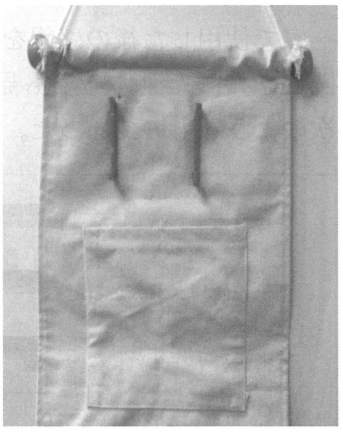


図9：廃材利用作品

以上のようにウォールポケットを縫製するさまざまな場面で，どの方法を用い製作すればよいのかなど多面的に考え，「問い」に対して最適解を導き出しながら作業を進めていった。

(3) 10時　ふりかえり

① 10時　家庭で実際に使用し,自己評価を行い,学級で共有する

まず班内で発表会（**図10**）をし，班の代表（９人）が学級で発表をする方法で行った。友達の発表を聞いて次のような感想を生徒は持った。

- ウォールポケットを自分とは違う目的で製作している人や，目的は同じでもデザインが違う人の作品を見て，同じ布からいろいろなアイデアが生まれていることがわかり面白かった。（生徒Ｅ）
- 発表を聞いていると，実用性とデザイン性の両方を兼ね備えたウォールポケットが多かった。用途に合わせてポケットの形や大きさに工夫が見られた。（生徒Ｆ）

また，自分自身の作品について家で使ってみた後の感想は次のようなものがあった。

- わりと家族のみんなが使ってくれて良かったです。鍵を入れるのが便利になりました。家の雰囲気に合ったウォールポケットが作れました。これからも使い続けられるといいなあと思いました。（生徒Ｇ）
- 自分の家を改めて考え直せました。みんなが困っていることを探し、それを改善するためのものを作ることができたのでよかったと思います。これからも家族で大切に使いたいと思います。（生徒Ｈ）

図 10：班内での発表会

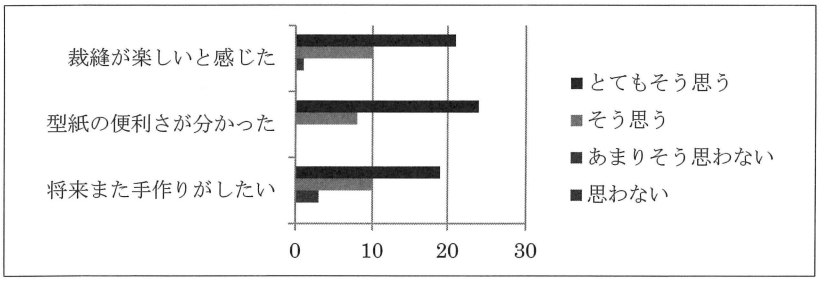
さらに素材について関心をもち新たな「問い」への広がりもみられた。

・小物はもちろんティシュ箱などを机の上に置かなくてよくなったのは大きなメリットだと思います。おかげで机を少し広々と使えるようになりました。ただ，布地があまり伸縮性のないものだったのでもう少し伸び縮みする物の方が良かったかなと思いました。（生徒Ｉ）

5　おわりに

本題材では自分の願いが込められたウォールポケットを作るという一連の製作過程を通し，製作方法を多面的に考えながら計画的に製作を行った。班の中での教え合いや意見交換により友だちのアイデアや意見を取り入れることで，自分の作品の「問い」をより深く追求する姿が見られた。

家で使用した後の感想を書いた生徒Ｉのように使ってみてさらに改善点を見つけたり，布製品に関心を持ったりする姿も見られた。題材の学習終了後，本学級32人にアンケートをとった結果は次のようなものであった。



自分の「願い」が布製品という形になることで，達成感が得られ裁縫の楽しさを多くの生徒が感じられた。また「型紙」により，作品作りの見通しを持ち製作し，完成できたことも生徒の自信になった。このような経験により，多くの生徒が布製品の製作へさらなる意欲を持つことが出来た。

この学習を通し，生徒が自らの生活をみつめ作品を製作する中で，「願い」を形にするために試行錯誤し，主体的に「問い」を追求する姿が見られた。また，生徒は完成の喜びを味わいさらに実際に使用してみて，今後のものづくりへの意欲をもつきっかけになった。

今後はさらに他の題材においても，生徒の生活の中から「願い」をもたせ，その「願い」を形にしたり解決したりする中で「問い」を追求する授業づくりを進めていきたい。

（文責　青木　佳美）